

1 図画工作・美術科における「一人一人が問いをもち追求する姿」

次の文章は、5年生が昨年度に取り組んだ題材、「アートの中にとびこもう～映像のトリックアート～」3,4時間目における学習活動後の日記である。

今日、図工が2時間たっぷりありました。けっこういい段階に入っていて、初めて映像に映って絵の中に入ってみました。えさの魚をおとなのペンギンにあげたいけど向きがちがっていき、いかにもダンボールからくりぬいただけの魚の形になりました。映像を映した後、水草をかいたり魚をふつうの画用紙で作って色をつけたりしました。本当は動物園や水族館の中と想像していたけど、だんだん海の中にサンゴがあるように水中でくらししているようにしました。(児童A)

児童Aは、ペンギンの飼育員になってえさを与える場面を初めて映像に映し出してみたところ、予想していた物とは少し違っていると感じている。製作した物に思っていたような効果が得られなかったことや、作品の印象が海の中のように感じられたことを挙げている。また、友だちと一緒に作品の印象を話し合い、アドバイスをもらう中で、海の中の様子が表せそうだという作品のよさを見だし、表したいことを見直し、よりよくする方法を見付け出している。

本学校園図画工作・美術科における造形表現活動の中で、この一例に示されるような豊かな学びの姿を願う時、一人一人が問いをもち追求する姿を次のように考えた。

- 表現テーマに向かって願いをもち、自己の造形表現を高める姿
- 体験や他者との交流から表したいことを発展的に見いだす姿
- 題材を越えて、学んできた知識や技能を活用する姿

一人一人が問いをもつとは、自分の考えの価値やよさを拠り所としたり、他者と共有した価値やよさに基づいたりして、自分の造形表現を問い直すことであると考え。そのためには、一人一人の子どもが、表したい事柄について確かな願いをもつこと。その上で、自己の造形表現の目的を達成するために、感性を働かせて自分や他者の造形表現や表現意図に問いかけを行うことが大切である。

追求する姿とは、見いだしたことや過去の経験や技能を駆使しながら、目的を達成するために新たな表現を獲得しようとする姿であると考え。

自分の取り組みを認め、他者から表現のよさを認められる中で、自分なりの達成感を味わうことができる造形表現活動の営みの中に見られる姿であると考え。

2 「一人一人が問いをもち追求する姿」を求めて

本学校園図画工作・美術科の授業の中で、一人一人が問いもち追求する姿を求める時、子ども一人一人がその時々に応じた学習動機をしっかりともち、大切にすることが大切になると考える。学習場面の中で子どもが素材や表現テーマについて素朴な気付きをもち、素直な興味をもつ瞬間はたくさん見られる。しかし、自己の造形表現を追求するようになるまで、子どもの気付きの質を高めたり、学習動機にまで興味を高めたりする必要がある。そのためには、子ども一人一人が確かな願いをもち、問いを引き起こすことが肝要になると考える。問いが生まれるからよりよいものへ更新しようとする。このような、質の高い気付きや興味、学び合いの相互作用の関係の中で造形表現の質を高めると

考える。

そこで、一人一人が問いをもち追求する姿に子どもをつなげる手立てを以下に示す。

- 造形表現の可能性を広げるために素材、技法などを吟味したり、表現テーマや表現意図に合致しているかなどについて検証したりできるように、新たな視点を示す。
- 子どもの造形表現への願いを確かなものにするために、子どもの必要感に応じた「掘り下げる」「提案する」など教師のはたらきかけを行い、考えの根拠や理由を明らかにする。
- 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させるために、学び合いの視点や論点を明確にする。

子どもの追求意欲を支えることの一つに、子どもが自らの学びを自覚することが考えられる。子どもは、自分が表したいと考えていることについて漠然としたイメージを出発点としていることが多い。表現・鑑賞の領域を問わず、素材や技法と向き合ったり、発想や構想を図や絵、言葉にかき表したりすることで、イメージを具体化・具現化する過程をたどる。よりよい表現方法や発想を引き出すために、自分が表したいと考えていることを自分自身が明確につかむことが大切である。また、自分が表したいと考えていたことは本当にこれでよいのかなど、見直しを図ることが大切である。ふりかえりの機会を有効に働かせながら、自らの学びを自覚することが子どもの高い意欲を保ち、追求意欲を支えることにつながると考えられる。

学びの自覚をうながす前提として、造形表現への願いを確かにすることが大切であると考え。そのためには、子どもが表したいと考えていることについての発想や、その考えのもとになった根拠や理由を、子どもとともに明らかにしていく必要がある。図画工作の製作活動や美術科の制作活動の中では、考えていることが多少漠然としていても、作品としての形を成すことがあるため、所謂、「浅い」追求が生じてしまうことがある。子どもが確かな願いを持つことで、自分の造形表現としっかりと表現意図をもって向き合うことができるので、子どもが必要感をもって追求し続けること、つまり、問いをもち追求することが可能になると考える。

学び合いの場面では、自らの考え（個人思考）と集団の考え（集団思考）をつなぐことにより、取り組みや表現のよさ、価値が共有され、表したいと考えていたことがより明確になったり、新たな可能性が示されたりする。そこには子どもの問いがあり、よりよいものを求める願いがある。教師は、子どもの問いを刺激し、話し合いをゆさぶる共通の視点を示すためのはたらきかけを行うことができる(図1)。

題材の設定や単元の構成に当たっては、学び合うための意図的な場面を設定することで、他者の経験を追体験し、新たな気付きを獲得することが期待できる。

授業の中で教師のはたらきかけが有効に機能したり、授業そのものを見直し改善したりするために、子どもの姿を具体的な視点をもって教師が捉えるようにしたい。その視点は、教師が子どもの学びの姿や追求の様子をより深く捉えるためのものであり、子どもの考えが生まれる根拠や理由を明らかにするものである。

(文責 三桐 撰夫)

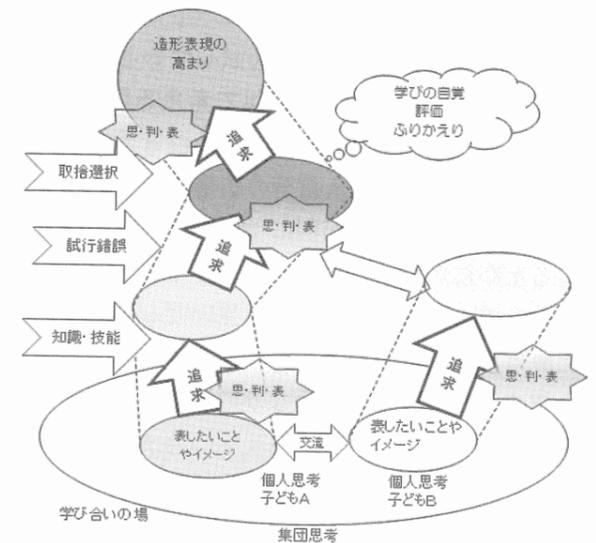


図1